

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。	2 t /10a
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。 ○有機質肥料施用技術 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。	化学合成窒素量 ・金時にんじん 20. 2kg/10a 以内 ・西洋にんじん (春・夏播き) 10. 6kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	○機械除草技術 除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。 ○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：B T剤(ハモンヨウ、ヨウムシ)など ○対抗植物利用技術 土壌害虫密度を低下させる植物を栽培することにより害虫被害を軽減する。 ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱などの利用により土壌病害虫を駆除する。 ○光利用技術 光反射資材利用により害虫を忌避させる。 ○フェロモン剤利用技術 フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。 ・リトルア剤(ハモンヨウ)など ○マルチ栽培技術 紫外線反射マルチ、生分解性マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。	化学合成農薬成分回数 ・金時にんじん 6成分以内 ・西洋にんじん (春・夏播き) 5成分以内
その他の留意事項 有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。 連作障害回避のため輪作に努める。 収穫後の残さは、適切に処分する。		